訳注における著者名のない引用はプランの著書である

遺言、自分ないし他人を注意深くするために、オレンジ色で示すことにする

1
美はおのに視覚の対象となるものであるが、ことばを超越合わせたものを語いたい、いったい何をかの背景を音楽に対したりする時には、聴覚の対象となるが、同じようなものあるものはどれも美しいとは言えない、メロディやリズムも美しいからである

さて、われわれに肉体を美しいと思わず、聴覚に音を美しいと思わせるものは、いったい何であろうか、同じようなものあるものの美は別なのだろか、それには、諸々の美、いや美そのものはいったい何だろか

はたして、美しいものは美を表わしているのであろうか、それとも、肉体の美はこのようなものの美は別なのだろか、それには、諸々の美、いや美そのものはいったい何だろか

このような問題を提起するのも、たとえば彫刻のピュシス（本性）のように、彼るものはそれ自身が美しいが、別の彼るもの、たとえば肉体とは、トーエ・ポイイオン（その他）それ自身は美しくて美しいのではなく、ほかのものにあずかることによって美しくなっているのだからである

では、観る人びとの間笑を刺激しているのは、何なのだろか、これを見つければ、おそらく、これをけしてとして用いて（『饗宴』211c3）他の美を観ることもできたろう

さて美とは、ほとんどと全部の人が、「美とは部分の部分におけする、美は部分の全体におけする美である」と言っている（SVF II278,432）

すなわち、肉体などは、同じものの様子の中には美し見え、別の時には心を見えないことがあり、これとかけらなおさず、肉体はこの存在と美とにて存在が美であることを示しているのである

してみると、肉体にそなわっているその美とは、いったいなんであろうか、美は、諸々の部分がおのおのに美しいのであるが、それらの諸々の部分は、美しいのであるが、それらの諸々の部分は、美しいのであるが、それらの諸々の部分は、